

## 情報産業論（そのⅦ）

阿 部 耕 一 朗

（受付 2002年5月10日）

### 芸能産業（続）

前回の音楽を中心とした論考において、小泉文夫が日本の4種類の音階について、明治の初めの段階ですでに発見されていたのにそのことについて触れていないのは、不思議だと述べた部分があるが、その後、彼の書いた論考の中に、ちゃんと触れているのを発見した、しかもそれを批判しているのである。筆者の不明をここに修正しておきたい。また日本語の構造特性から他の諸言語では、詩形が頭韻および脚韻によって枠組みが構成されているものが多いにもかかわらず、日本語の詩形はシラブル数によって構成されている事を追記しておきたい、ちなみに、俳句は5, 7, 5であり、短歌は5, 7, 5, 7, 7のシラブル配分によって構成されている。またかつて庶民によっておおく歌われた都都逸は、7, 7, 7, 5である。

なお音楽に関してもう一つ追記するとすれば、義務教育段階における音楽教育の変化についてである。

最近になってやっと文部省は義務教育段階における音楽教育に関して、本来の日本の音楽に関しても教育しておかなければならないと考えるように成った事は、すでにご承知のとうりであるが、聞いて見ると、日本の音階として、レミソラドレ という風に教えているようである。しかもこれをヨーロッパ音楽の音階である、ドレミファソラシド と対比すれば、ファとシの音が抜けている事をとらえて、ファが第4音でありシ（導音）が第7音であるところから、四七（ヨナ）抜き音階とも呼んでいる。しかしこのような教え方だけではいけないと、私は考えている。むしろ日本音楽の音階として教えるなら、もう一つ ミファラシレミ も、むしろ主体とし

て教えるべきであると考えている。と言うのは、前者の レミソラドレ の場合は前半のテトラコードが日本音階の律音階となっており、後半のテトラコードが民謡音階となっている。また後者の ミファラシレミ の場合は、前半のテトラコードが都節音階であり、後半のテトラコードは前者と同じく民謡音階である。

ここで日本の 4 種類の音階がどのように使われていたかについて触れておこう。多数の一般庶民の愛唱する多くの曲は、都節音階か民謡音階が主体となり、律音階や琉球音階は、ヨーロッパ音楽に見られる転調に類する曲想展開に使用されるのが主体となっている。律音階を主体とする曲は、雅楽の中に一部残っていると考えられる。以上追記である。

すでに前回でも一部触れたように、コミュニティと言うのは何らかの資産を共有する人間集団の事を指しており、しかも現在ではそれらの資産は圧倒的に情報資産となっている。

人間が言語シンボルを獲得して、最初の段階ではおそらく事実あるいは現実事象の連絡、確認のみに使用されていたであろう。この段階での通報内容は、あくまで共時的なものに限られていたはずである。

時間的な要素が人間の通報内容に加味されるのは、ある程度コミュニケーション場が成長してからのはずである。ちなみに英語の “while” とドイツ語の “weil” と日本語の “間” は、いずれも最初の段階では空間的間隔のみを表示する単語として生まれており、ある程度の時間経過の後に時間的間隔をも示す言葉に意味拡張している。しかもこれら三つの言葉は、いずれもその後、原因理由を表す接続詞に転化している。つまり因果の関係を類推するにはその時間的間隔が決定的な要因になる事からの変化と考えられる。(現在の日本語では原因理由を表示する言葉は助詞の発達によって取って代わられ “間” を使用することはほとんど無くなったが、かつての候文では、“何々でございますので” という意味に対して “何々にて候間” と頻繁に使用されていた。) このように人間同士の通報内容の中に、時間的要素

が加味されるように成って、はじめて通報事象のなかに物語的要素の加味が可能となってくる。

つまり通時的空間の伝達が可能となる段階にまで言語シンボルの機能分化が進んできて初めて物語性を持った説話の伝承が始まるわけである。

一つの物語がコミュニティメンバーの多くの人の口を経て語り継がれる段階では、その一人一人の口を経るごとに、個々のメンバーの潜在意識下の願望が少しずつ加味されて、その集団固有の伝説や神話が形成されるのだと考えられる。このようにして多種多様な物語性のさわりの部分に対する同種の感動が多数のメンバーに共有されたとき、そこに共有化された美意識が育ってくる。そうしてその美意識が潜在意識下において、個々のメンバーの行動様式を規制するようになってきたとき、これをその集団の文化と呼んでいる。

同時にこのような経過を経て、その集団の大多数のメンバーが共有化された美意識に基づく共通の願望をもち、その願望事象を擬人化した時、それはその集団の神や仏に転化するのである。

これまで芸能と宗教の関係については、宗教がまず生まれて、その中核となる神や仏をことほぎ、たたえる催し物として芸能が生まれたとする考え方が定説であった。しかしこのような事象を発生させる場、つまりコミュニティメンバーに共有化された仮想空間がある程度形成されていなければならないことになる。そのような空間こそ、集団メンバーの間にかわされる物語性を持った多種類の説話を通じて惹起される感動をベースにした、共有化された美意識の累積空間でなければなるまい。

たしかに宗教空間の中核を形成する神や仏が、ある程度形成された段階では、集団の中の説話形成エネルギーは、その神や仏をたたえ、ことほぐ事のために関与したであろうことは、十分に考えられる事であるし、事実それを裏付ける事象はたしかに多数存在する。

日本列島に最初に現れた神様を類推する事は、まだまだ民俗学や考古学その他の研究成果を俟たなければ軽々しく断定する事はできないが、現時

点で日本列島に所在する神社を見ると、末社の数が最も多いものとして挙げられるのは、八幡神社、稲荷神社、熊野神社である。

この三社は、大和王朝が形成される以前にすでに存在したであろうと言う事は、類推可能である。中でも熊野神社は、日本の有史以前に黒潮にのって、たどり着いた人たちの神ではなかったかと考えられる。ちなみに熊野新宮の社前にある御神木は“なぎの木”である。“なぎ”は海の風に通ずる。つまり暮らしの中に海が占める程度がかなり高かった集団の神であることが容易に類推できるのである。

また長野県長野市の所在する盆地を、今では善光寺平と言っているが、かつてはそこを含む、かなり広域の地方を“安曇野”と呼んでいる。

この安曇野は、あの険しい山中にありながら、海洋民族の代表とも考えられる安曇族の生息地であるということはすでに日本史の世界では認知されている事項である。ちなみに古代大和王朝における水軍の長官は、ほとんど安曇族の首長と考えられる安曇比羅夫によって占められている。

ところで、この安曇族と熊野にたどりついた先住集団は同根である可能性が高い、おそらく熊野を経由した一部の集団はさらに太平洋沿岸を北上して、静岡県三島に上陸し、此処からさらに陸路を北上して安曇野にたどりついたものと考えられる。三島には海の神として著名な三島大社があり、途中通過したであろう、諏訪地方の古い神社、諏訪大社の祭りの山車は、あの山中にありながら今でも船である。

また瀬戸内に所在する海の神様、三社のなかには大三島に所在する大山つみ神社があり、これが静岡県の三島大社と同じ祭神を祭っている。ある時期私は、瀬戸内の漁村近くの民俗資料館を見つけると必ず見学する事を続けていたが、その時の経験をまとめて見ると、各家の神棚に大三島の神を祭っているのは瀬戸内の四国側の漁村にほぼ集中しており、本州側の漁村には、住吉神社の祭神と宗像神社の祭神が混在しており、東三分の二は住吉神社系が主力となっており、西三分の一が宗像神社系である。ちなみに住吉大社は東の端大坂に有り、宗像大社は西の端福岡に所在する。これ

らは熊野系の海洋種族が日本列島にたどり着いた後で、朝鮮半島の西海岸をたどって日本列島にたどり着いた種族の氏神が住吉大社であり、おくれで同じコースをとった種族の氏神が宗像大社であると類推できる。そうしてその間に割り込んだのが熊野系の氏神であると類推できる。

ここでもう一つ余計な事を追記すれば、金毘羅権現はいずれの地方においても上記三種の神様と併祇されている場合が多いと言う事である。金毘羅権現は現在では神社として扱われているが、本来仏教系の仏様であったことから併存が可能であったと考えられる。

ところで先に挙げた、日本に現在のこっている三神社のうち、どうやら一番古いものは、和歌山県に所在する熊野三社である可能性が高い。と言うのも、すでに大和王朝の時代に入ってから、王朝貴族や、上皇、皇太后たちが、熊野詣を繰り返していると言う事実から推定できることである。近世、徳川氏による統治、幕末にいたって“お伊勢参り”が盛んになり、“ええじゃないか”運動が明治維新の進行と深い関係を持つことが日本史の世界では議論されており、“蟻のお伊勢参り”と言う言い方までなされてまるで古くからそうであったように感じられるが、“蟻の——参り”と言うのは、じつは熊野詣をさしていわれる場合のほうが、はるかに長期間であったと言うことを忘れるわけにはいかない。以前紀伊半島を自動車でもわり、めぼしいものを見て回ったとき、伊勢神宮に至り、その後足を伸ばして二見が浦で宿を捜したとき、この集落の各家の玄関に、“蘇民将来子孫の家”と書いた御札がまるで正月のしめ飾りのように正面にかけられているのを見て、大変驚いた。

と言うのも、この話は道教系の説話で、日本では須佐之男命扮する貧しい身なりの旅人がこれも貧しい蘇民将来の家で思わぬ歓待を受けて、翌朝本来の名前を名乗り、以後子子孫孫にいたるまで疫病を寄せ付けないう約束をしたと言う話である。これまで二見が浦は伊勢神宮に直結したモニュメントに違いないと思っていたので、私にとっては大変な驚きであった。と言うのもこの説話は熊野系のものと考えられるからである。なおこ

の説話は信濃国分寺においても残っており、同寺では今でも六角柱の擬宝珠状の御札に大福長者蘇民将来子孫之人也と墨書したものを参拝者に渡している。なおこのことは、後で分かったのであるが、坂口安吾がすでに昭和26年3月から文芸春秋に連載した、“安吾新日本地理”の冒頭、“安吾伊勢神宮にゆく”のなかでこの事に触れており、安吾も驚いたとしている。熊野詣だが、いかに伊勢説話より古いかと言う事の証左であろう。ここでもうひとつ余計な事をいうならば、日本の高度成長期に中心になって働いた産業戦士たちの、精神的基盤つまりイデオロギーを支えたのは、司馬遼太郎の歴史観であり、文化観であると考えられるが、それを支えたのは坂口安吾の文化観であり、歴史観ではなからうかと思われる。と言うのもこの両者のイデオロギーは色々なところで一致している点が挙げられるからである。考えてみれば、第二次世界大戦の戦後、“墮落論”を初めとする一連の評論、創作によって坂口安吾がデビューしたとき、読書界にある種のブームを起こしたが、それを支えた読者層の中核年代の人が実は司馬遼太郎達の年代なのである。このことはこの分野の研究をする人たちにとっては軽視できない事項であろう。

さて神道系の説話をめぐる話題からはなれて、一方仏教の世界でも、同じような現象として“四国遍路、八十八箇所巡り”と言うのがあるが、この八十八は何に基づくのか、という議論の中で、先行モデルとして熊野詣の九十九王子と同じ考え方であると言う説が有力なものとして残っていることを思えば、日本人の宗教祭事に関しては、熊野三社がかなり強いプロトタイプ型の影響力を保持していることが、類推できるのではなからうか。

ここで芸能に視点を返えしても、日本の中世以後における芸能の、原形は熊野比丘尼達が諸国に散って、熊野権現の靈験あらたかな説話を辻に立って説いた、説教節に由来する部分が極めて大きいことに触れておかなければならない。

ここでその説教節について、触れて置くことにしよう。さきに触れたように言語シンボルが通時的仮想空間を伝達可能なレベルにまで高機能化し

た段階では、さまざまの“語り”が生まれてきたであろうし、それらの中には軽度の旋律（節付け）を伴ったものも生まれてきたはずである。言語シンボルを使った通話行為も、音楽も、音をメディアとして使用するコミュニケーション行為であると言う点では、基本は同じであると言うことは十分認知しておかなくては成らないであろう。

ところで熊野は三社を含めて神道系の神社でありながら、そこに集う御師や山伏も含めて、比丘と呼んでいるが、比丘は本来仏教系の僧をさしている呼称であるにもかかわらず、ここでは混在がはっきり残っている。神仏混交の時代を明瞭に残す証左の一つであろう。ちなみに本地垂じゃく説では、本宮を阿弥陀如来、新宮を薬師如来、那智を十一面観音菩薩とあてている。仏教の世界では、普通三仏併存の場合、中心が如来、両脇が菩薩、四角が天部の仏像と決まっているのに、これは例外的ケースである。

一方比丘尼の方であるが、これは熊野三社の祭事についていた巫女を主体とする女性群である。もちろん中には御師、山伏達のつれあいも含まれていたものと考えられる。

彼女たちは、ある時は辻に、またある時は寺社の境内で、文箱にいれて持ち歩く地獄絵巻きや、極楽絵巻きを取り出して、独特の節付けに乗せて絵解きを語り歩いたわけである。

後世五大説教節と言われる、独特な“語り”は後に能や歌舞伎に再録され、多くの民衆に親しまれたものが近世にまで語り継がれている。しかし五大説教節に何を入れるかについては、時代と人により多少の差がある。どの場合にも挙げられるものを、一応挙げるとすれば次のようになるであろう。刈萱、俊徳丸、小栗判官、山莊太夫、信太妻、浄瑠璃姫等であろう。これらのうち後世に影響の深かったものについて、いくつか触れてみよう。

まず浄瑠璃姫物語であるが、これは三河矢作の長者が薬師如来に願をかけてさずかった娘と牛若丸つまり義経との恋物語である。薬師如来にお願いして授かった娘だから名前は浄瑠璃姫と言う、ちなみに薬師如来は正式名称を薬師瑠璃光如来と言い、同如来の住んでいるところを浄瑠璃国と言

うのである。後世この物語を見事な節回しで語る太夫が出てきて、同様の節回しを浄瑠璃節と呼ぶようになり、やがて人形と結びついて文楽を形成することになるのである。

つぎに山荘太夫であるが、この説話は後に森鷗外が山椒太夫の名のもとに小説にして広く知られた名前となっている。山荘、山椒、といろいろな表記があらわれるが、実態は散所のことである。散所と言うのは、貧窮化した農民やその他の事情によって、定住地から離れて自遊民としてさすらう人達の溜まり場である。そうして、其処には親分らしき男が居て、不時の労働所要に対して供給支配をする者を、散所太夫と呼んでいたのである。この階層の中から芸能専従者も生まれているし、各種の技能者も生まれている。しかしこの階層の出身者は、総じて河原者あるいは河原乞食と蔑視差別の対象にもなっている。

小栗判官の話は、小栗判官と照手姫の物語で、これも浄瑠璃や歌舞伎の題材として取り上げられた物である。照手姫の親や兄弟にはかられて毒殺された小栗判官を、熊野権現のお告げにしたがって照手姫が車に乗せ、熊野湯の峰の湯にひたすと、死んだ小栗判官がよみがえると言う筋である。今でも熊野本宮の裏山を超えると、坪湯と称する温泉があり、道の側の溪谷の肩に岩をくり貫いた湯船があり、かたわらには小栗判官ゆかりの坪湯と明記してある。

信太妻は、最近変なブームを起こしている陰陽師阿倍晴明の出生怪奇談である。命を助けられた狐がそのお礼に女に化けて阿倍保名に嫁ぎ、晴明を産むという筋で、“恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉”と書き残して姿を消すという物語であり、浄瑠璃の題材として何度も取り上げられたものである。

刈萱道心とその息子石童丸の場合も、JR長野駅から善光寺にいたる表参道には刈萱堂が建てられており、其処には親子の像まで安置してある。これらはいずれも、仮想空間の中に展開された単なる、説話であるに過ぎないにも関わらず、現実世界の中に、その証左であると言わんばかりの遺物



と称されるものが、ちゃんとしつらえてある。

と言うことは、当時の人々が如何に心深く、揺り動かされたかを表すものと考えて良いであろう。

以上のようなことから、宗教も芸能も人間にとっていわば同根のものであると言っても言い過ぎではあるまい。

芸能を主題とするテーマから、その同根と考えられる宗教現象のほうに次第に移っていったので、ここであらためて宗教をめぐる最近の話題について触れて置こう。

と言うのも、アメリカにおける同時多発テロ以来、それが宗教の違いから来る人間同士の殺し合いであると多くの人に捉えられているため、宗教をめぐる議論が随分にぎやかになっているからである。

考えてみれば、あの同時多発テロの起こった後、私は学部での講義情報社会学の時間に今日の講義は、読み切り短編であると宣言して、この事件の背景がどのような構造に成っているかを説明した。

すでに本稿の3回目においてネットワーク社会について触れた時、グローバルビレッジと言われるような社会の到来は避けられない事であり、そのためには国民国家なるものはいずれ解体して無くなる運命にある事を指摘した。その頃から、人類の未来展望を考えれば、現在私たちが意思決定を迫られた時、その判断基準となっているもの、それは此処300年の間にたどったヨーロッパ社会の変転を標準として形成されたメジャーである。この事に問題があるのでは？と思いはじめた。このような標準メジャーにユーロセントリズム（Eurocentrism）という勝手な英語をつくって名付け、21世紀と言う100年は、このユーロセントリズムが人類の歴史に果たした良かった点、および悪かった点を総決算して見なければ、次の新しい人類社会の、できれば全人類に共有化できるようなエトスの創造は難しいのではなからうか、と思いはじめた。したがって事ある毎に、21世紀と言う100年は、ユーロセントリズムの決算期である、と言い続けている。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は共通の神“エホバ”を中心とする同根の宗教である。中心の神エホバは人間たちに、自ら選んだ使徒を通じてその意を伝えた。その第一の使徒はモーゼであり、第二の使徒はキリストであり、第三の使徒がムハマッド（マホメット）である。それぞれの使徒と神とのかかわりは、それぞれ旧約聖書、新約聖書、クルアーン（コーラン）に記録されている。日本人にわかりやすい例で説明するならば、同じ仏教のなかに天台宗、真言宗、浄土宗が並立しており、大きく3種に分れているのと、似たような関係にあると言っても良いのではなかろうか。しかるに唯一神教である、これら三種の宗教はヨーロッパ大陸の中で、およそ1300年にわたる血なまぐさい歴史を続けている。

イギリスでは既にシェークスピアの時代に、彼が書いた“ベニスの商人”に見られるように、およそ唾棄すべき人格の人としてユダヤ人を描き、喝采を博している。このような差別感覚は最後には第2次世界大戦中に起こった、ヒットラーやスターリンによるユダヤ人大量虐殺にまで至る事になる。

一方この3種の宗教は同根であることから当然聖地は共通になるが、その地エルサレムがサラセン帝国時代にイスラム教徒におさえられると、キリスト教徒達は十字軍と称してこれらの虐殺に出かける事になる。このことは西暦1095年から続くのである。

この間、ユダヤ教徒達はヨーロッパ全域にひろがり、各地に生息していたが、ヒットラーやスターリンの暴挙に遇うと、資力のある人たちは、みんなアメリカへ亡命していった。したがって今アメリカの世論形成について、有力な知識人はユダヤ系の人たちが多くなっている。そのため今のアメリカでは、大統領になりたければユダヤ系の知識人を怒らせるようなことは決してしてはならないと言われている。

一方その以前、各地に分散して暮らしているユダヤ人たちは、自分達の国を持ちたいと言う切実な願いが嵩じて、第一次世界大戦のころから、シオニズム運動を起こすことになる。

それが実を結ぶのは第二次大戦後であるが、国際連合の場においてイス

ラエルの地にユダヤ人の国を作ることを決議するにいたる。当該の地域をイスラエルとパレスチナに分割することになるのである。ユダヤ人がこの地に住んだと言われるのは、旧約聖書に書いてあるように、およそ1300年昔のことである。そうしてその地に長年住み続けたパレスチナ人たちは締め出されることになる。このことがパレスチナ難民の問題をおこすことになるのである。

考えてみれば、ユダヤ人への差別問題にしても、大量虐殺問題にしても、いずれもキリスト教徒とユダヤ教徒の間で起こった事象である。そのつけがイスラム教徒にまわされる、という大変奇妙な事態を引き起こすことになってくるのである。

最近のドイツの新聞 Die Welt には、Kein Frieden in Nahost と題された記事が連続して掲載されている。近東に平和はないと言う記事である。（Nahost という単語に遭遇して、最初なにだろうと思ってよく考えてみたら、Nahe Ost の省略形であることに気づいた。最近ではドイツ人もこう言う省略もやるようである。）

アフガンの問題も複雑である。考えてみればヨーロッパ先進国はその資本主義社会の初期の発展段階で、植民地を必要とし世界の各地に植民地を確保した。本来、国と言う形態は同一の行動体系つまりエトスを共有する人間集団によって形成されるべき物である。この頃のヨーロッパ先進国はいずれの植民地においても、その管理運営のために都合なように国境線をひいている。そのためエトスを共有するコミュニティ集団がいくつにも分断されると言う悲劇も各地で起こっている。ちなみにアフリカの地図を見ると国境線が直線であるケースが多い、国境線と言うのは自然の山なみの稜線によってしきられる場合と、自然の大河によって仕切られるのが本来の在り方である。

このことによって引き起こされる悲劇が中東からアフリカにわたって広く散在しているのである。アフガンもそのケースである。

もう一つ最近のめぼしい動きを見ると、環境保全の問題がクローズアップしている。せっかく京都でそのための国際会議を開き、議定書まで作成したにもかかわらず、一番重要な要の国アメリカが異議をとなえて困った状態になってしまっている。

このことの影響もあってか、最近環境保全のための考え方や方策に関する論考が増えてきている。

その一つに安田喜憲の労作である環境考古学の提唱がある。彼は長年花粉分析を通して人間をとりまく地球環境がどのように変遷をしてきたかを探ることから、これもすでに早くから和辻哲郎の風土をうけて、人間の文化はその生活環境から強い影響を受けるものであり、その点で一神教は砂漠の思考から産まれるものであり、多神教は森林の思考から産まれるものであるとする鈴木秀夫の労作を受けて、一神教の人達の自然に対する考え方は自然を戦う対象と見る点を指摘し、この考え方では自然環境の保全は極めて難しい事項となると主張している。

たしかに庭園の作り方を見ても、ヨーロッパの庭園は幾何学図形型のもが多く、これは自然に対立する在り方であるのは十分に理解できることである。

一方アジア特に日本の庭園の状態を見ると、狭いスペースの中でも苦心して深山幽谷を模しているとしか思えないような作り方である。しかも平安時代の作庭術の本“作庭記”を見ても、その中には禪に通ずるような、石や池がそのためのシンボリックの意味を持たされていることが感じ取れる。このことは、たしかに自然のなかに没入したいと言う願望のあらわれと理解できる。

#### 参 考 文 献

- 落合清彦 歌舞伎の芸 1984年 東京書籍  
小沢昭一 ものがたり芸能と社会 1998年 白水社  
芸能史研究会 日本芸能史 (全7巻) 1988年 法政大学出版局

阿部：情報産業論（そのⅦ）

- シュペングラー, O (村松正俊訳) 西洋の没落 (全2巻) 1995年 五月書房  
鈴木秀夫 森林の思考・砂漠の思考 1993年 日本放送出版協会  
高木浩志 文楽の芸 1984年 東京書籍  
三隅治雄 民俗芸能の芸 1984年 東京書籍  
安田喜憲 東西文明の風土 1999年 朝倉書店  
和辻哲郎 日本芸術史研究 1971年 岩波書店  
和辻哲郎 仏教倫理思想史 1985年 岩波書店

Summary

On Information Industry (Part VII)

Kohitiroh ABE

Human group has communized beauty sense ,through various entertainment. And human group build up group wish upon communized beauty sense. Then this group wish becomes God and Buddha of human group, when the group wish is personified. In this article studied social function of religion and entertainment.